

「三井家が伝えた名品・優品」展

三井記念美術館（東京・日本橋） 2020.07.01～08.31



本展は開館 10 周年を記念し開催される特別展で、三井家伝来の国宝・重要文化財を含む館蔵品を、東洋と日本の古美術に分けて会期を 2 部制にした展示である。

第 1 部 「東洋の古美術」 07.01～07.29

中国絵画や墨跡、陶磁器、漆器、敦煌経など。

第 2 部 「日本の古美術」 08.01～08.31

国宝「志野茶碗、銘卯花塙（めいうのはながき）」などの茶道具や日本画、書跡、能面刀剣など。

茶道具《唐物肩衝茶入（からものかたつきちやいり）（北野肩衝）大名物》



唐物(中国製)の茶肩衝文化を築いた室町幕府八代将軍「足利義正」の収集品であったとされる。

第 1 部での主な展示品は、「粉引茶碗（三好粉引）、「六祖破経図」、南蘋筆「花鳥動物図」、「オリンピックの切手」、「呉須赤絵帆船図大皿 1 枚」などの作品が展示されている。

円山応挙筆《雪松図屏風》六曲一双 紙本淡彩 各隻 155.7x361.2cm

画伯の唯一の国宝 天明（1786）年頃 江戸時代・18 世紀 第 2 部で展示

「円山応挙」（1733～1756）は「近代絵画祖」とされ、写生画風は描かれる対象が本物らしく見える、それまでに全くない新奇なスタイルであった。



雪の積もった「3本の松」を描いた作品で、背景の金泥が冬の朝を思わせる。雪は白い絵具などを塗らないで、紙の白さをそのまま生かして、そこに「松」を加えることで、新雪のふわふわした質感を見事に表現している。

本作品は、「応挙」の写生的態度と空間意識が清らかで美しいハーモニーを奏でる日本絵画史上に新しい世界の幕開けとなるもので、右隻の直線的で力強い「老松」と左隻の曲線的で柔らかい「若木」を並べると、両隻の間の画面中央部に出現した余白が空間の広がりを感じさせると解説がされている。